



十二月冷酒杯シリーズは、ひとつの木から削り出した木地に漆を塗り、箔絵や漆絵で各月の表情を表現。二月の杯は残雪が残る大輪の椿が描かれている。

京漆器

深み、光沢のある濃い黒を「漆黒」と呼ぶが、これは漆の黒色から用いられた言葉。黒、朱に代表される漆器は各地の工芸品として親しまれ、ここ京都には京漆器がある。貴族文化と共に始まり、茶の湯文化の侘び寂によって確立されてきたものだ。

日本における漆の歴史は、縄文時代の遺跡から漆を塗った容器が出土したのが始まりといわれ、飛鳥時代には唐から仏教と共に漆工芸技術が伝来。奈良時代には東大寺や唐招提寺に麻布を貼り重ねたものに漆を塗り固めた乾漆仏像がつくられている。平安時代、京都に都が遷されると貴族好みの蒔絵や螺鈿が施された調度品が登場。室町時代に入ると茶の湯の文化と共に歩み、棗などの茶道具にも重宝された。この時代につくられたものを「東山時代物」と呼び、侘び寂に徹した精彩なものが多い。江戸時代になると琳派の源流である本阿弥光悦の蒔絵が生まれ、以降の京漆器は現代に至るまで名工によって支えられ

ている。

薄さを極限まで追求する美意識

漆器は大きく3つの工程が分業で行われる。まずは木地師が枳、水目桜、欅などの木を丁寧挽き木地を作る。木は呼吸しているため、湿度や気候によって左右されるもの。木の種類によって微調整しながら挽いていく。特に棗の薄さは京漆器の真骨頂。蓋がすーっと落ちて密閉するようにコンマ数ミリ単位で計算し、蓋と口の合わさる部分には薄くて強い紙を貼り、割れを防いでいる。木地ができると半透明の生漆を塗って木地固めへ。漆を木目の中まで染み込ませることで繊維を締め固め、木地の狂いや湿度による縮み、割れをしっかりと防ぐのだ。

木地が完成すると塗師が漆を塗る工程へ。下地、中塗り、上塗りと塗りを重ねていく。漆の色は黒と朱が多いが、昭和以降は緑（青漆）や白漆なども増



豪華絢爛な蒔絵は見る者を魅了する美術品。象彦はかつての三井財閥の御用も受けていた。



蒔絵に用いる粉筒は先の部分から金粉を入れると、網目状の筒先から金粉が少しずつ出てくる。網目の大きさが異なる粉筒を使い分けている。



蒔絵が施された名刺箱は、アクセサリーや小物入れとしても使える。机上にあると華やかに。



冷酒杯の木地は水目桜。持ち手の部分を別に取り付けているように見えるが、すべて一本の木を挽いている。

棗の木地は極限まで薄く、ほかに比べて格段に手間がかかり出来上がりまでに20の工程を経る。ゆえに完成した棗は100万円近くするものもある。



えている。生漆に鉄を加えると黒に、顔料を加えると朱に、緑やベージュなども異なる顔料を加えて表現される。あずき色のように、黒に朱を混ぜて塗ることで表現されるものもある。

仕上げは蒔絵師が蒔絵を施す。和紙に描いた図案を漆で転写し、蒔絵の場合は図柄に合わせて、先端が網目状になった粉筒で金粉や銀粉を少しずつ蒔いていく。粒子の大小、重ねる回数によって一色で濃淡や陰影を表現していく細やかで難しい作業だ。重ねて描くのは版を重ねて摺る木版画と同様の考え方で、金粉を蒔いて炭で研ぎ、馴染ませては再び金粉を蒔き炭で研ぐ。この作業を繰り返していくと美しい艶や光沢が出てくる。

箔絵の場合は箔を貼り、漆絵の場合は漆で描いていく。技法はものによって使い分けや組み合わせられるが、漆というキャンバスに一発勝負で描いていく、失敗が許されない作業は緊張の連続といえる。

日々のものにも漆器を

京漆器の特長には華奢なフォルムやデザインもあげられる。先述のように、目利きの多い茶道家元のお膝元である京都には研ぎ澄まされた美が求められてきた。「京漆器は余白を生かしたデザインや、硯箱の蓋裏に蒔絵を描く趣向を凝らしたものが多いです」と語るのは木地師、塗師、蒔絵師と共に代々漆器を世に送り出している象彦の西村さん。1661年から漆器道具商として京漆器を手がける象彦は、重箱や棗、文箱など美しい蒔絵の漆器をつくる一方で、艶消しの碗や花びら形の銘々皿など現代の食卓にマッチする新しい漆器も提案している。購買層を広げて工芸品を現代のスタイルに――。京都で老舗が長く続いている理由が、ここにも垣間見える。

(取材協力：象彦)

<http://www.zohiko.co.jp/>